

# 医療的ケア児への 安全な在宅移行支援

「小児在宅移行支援指導者育成研修」  
修了者の活動レポート

第3回

## 自治医科大学附属病院 (栃木県下野市)

栃木県に2カ所ある総合周産期母子医療センターの1つである自治医科大学附属病院。2006年には、栃木県が策定した小児医療整備構想に基づき、大学病院併設型の小児病院「とちぎ子ども医療センター」をオープンした。県内では、獨協医科大学病院にも同様に設置されている。

### 研修や同行訪問を機に広がった視野

日本看護協会が実施した「小児在宅移行支援指導者育成研修」には、2017年度に2人、18年度に2人が受講した。18年度受講者である、NICU看護師の主任・小嶋飛鳥さんと、スタッフの廣澤真世さんは、現在、新生児集中治療部で「在宅支援係」を担当。廣澤さんは研修受講後、自ら希望して同係の担当になった。

小嶋主任と廣澤さんは、入職時から新生児集中治療部に勤務し10年以上のキャリアを持つが、他施設の活動を知る機会はなかったという。廣澤さんは「研修のグループワークなどで他施設の活動を知ることができたのは、大きな実りでした。自施設の活動を見直す機会となりました」と語る。小嶋さんは「受講生同士で作ったLINEグループを活用して、他施設ではどうしているんだろうと、今でも情報交換を行っている

ます」とほほ笑む。

研修では、訪問看護ステーションでの同行訪問実習を経験した。研修後にGCUから自宅などへ退院し退院後訪問を行ったケースは3件だが、退院後訪問看護などを通じて児の生活環境を知る機会が生まれ、スタッフも退院支援に興味を持つようになっている。

### 併設の子ども医療センターと連携

研修後は「NICU / GCUにおける小児在宅移行支援パスと教育プログラム」を自施設でどのように導入・活用するかを検討している。同院では研修前から、併設する子ども医療センターと共同で作成した小児在宅移行支援パスを活用しているが、日本看護協会版の児とその家族の各期に応じた多職種の支援内容が一元化されたパスを参考に再構築へ向け試行している。現在はNICUで使用するためのパスだが、今後は院内の正式な手続きを踏んで、院内共通の様式とし、子ども医療センターとの情報共有にも活用していきたいという構想もある。

週1回の「トリアージカンファレンス」は、NICU・GCUの在宅支援係と患者サポートセンター（地域連携室）で、多職種間で退院に向けて状況確認・共有を図っている。患者サポートセンターには、NICUから異動した17年度の研修受講者の看護師もいるため、連携もスムーズだ。子ども医療センターの外来看護師とも、月1回会合を行い、退院見込みの児とその家族などの情報を共有し、児と家族が退院後に初めて受診する子ども医療センターで戸惑うことがないように連携している。患者情報を共有し、細部にわたって連携を取れるメリットは大きい。



右から小嶋さん、新生児集中治療部  
師長の栗原日登美さん、廣澤さん

退院支援に関する教育プログラムの導入については、研修を受けてどのようなものにするかを検討中。経験年数に関係なくNICU・GCUのラダーに盛り込んでいきたいと考えている。小嶋さんは「今、これまで病院全体の手順書として使っていた“退院後訪問の手順”も見直しているところです。NICU用のものを用意したいと考えています」と力を込める。

本年度の研修にもスタッフを参加させたいという同院。チーム全体で退院支援のことを考える風土が根付き始めている。



【参考】「NICU / GCUにおける小児在宅移行支援パスと教育プログラム 2019年度版」を公開しました。所属施設の機能や特徴に合わせてご利用ください。  
[https://www.nurse.or.jp/nursing/josan/care\\_support/](https://www.nurse.or.jp/nursing/josan/care_support/)

【病床数】病院全体 46科 1,132床、MFICU12床、NICU15床、GCU21床。産科単科病棟【看護職員数】看護師1,438人(NICU39人、GCU31人)【平均在院日数】NICU20.4日、GCU13.9日【年間入院院員数】NICU227(述ベ5,386)人、GCU136(述ベ5,408)人